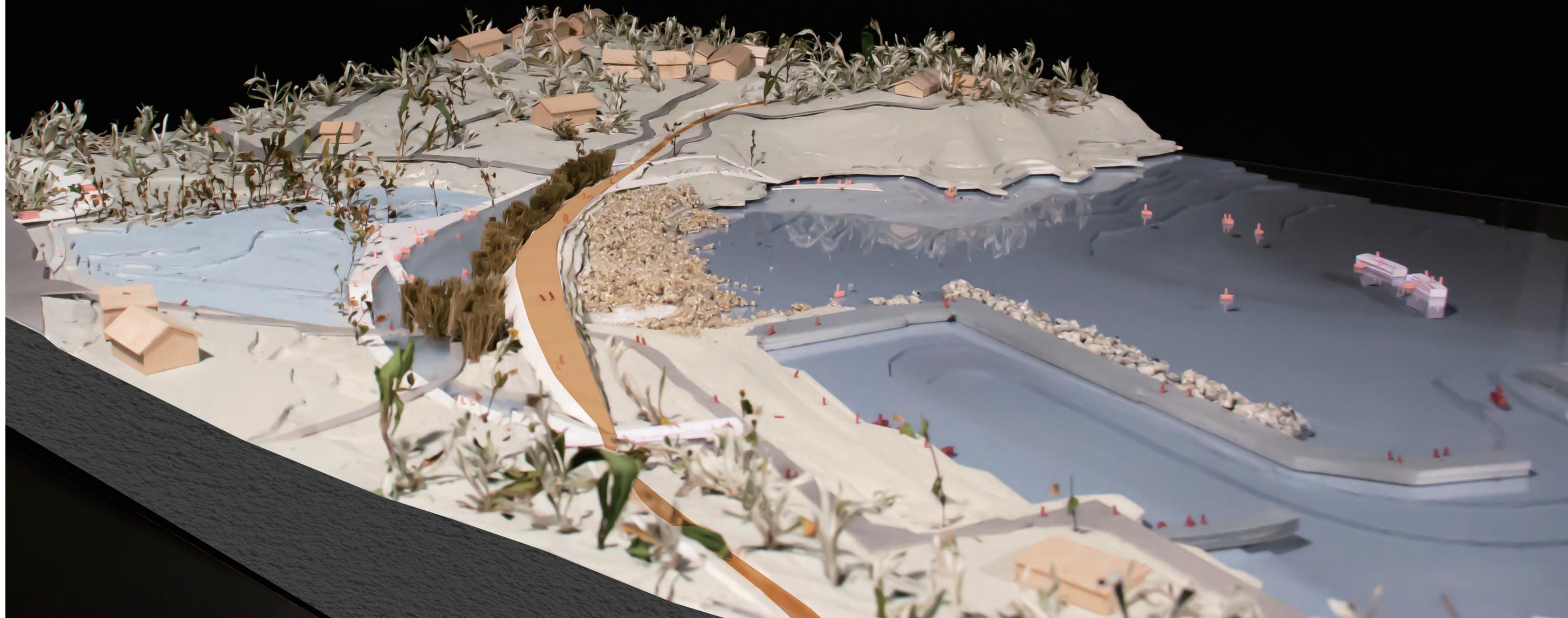
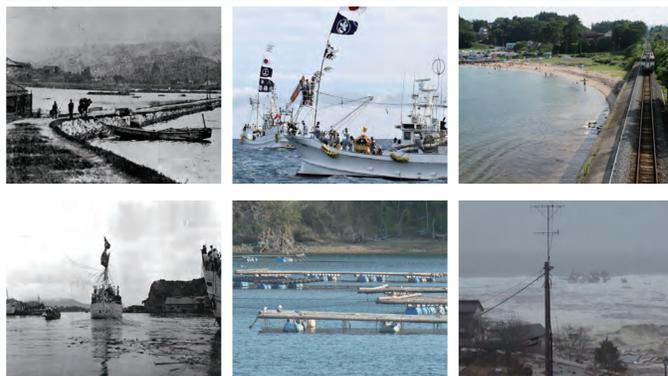


# 海との旅路

追憶と生業を活かす海岸デザイン



## 01. 海ともに歩んできた気仙沼の人々の記憶



リアス地形という特殊な地形にある気仙沼において海と共に生きる事は使命でした。漁業を生業として生計をたて、海から離れた高い場所に家を構えることで、度重なる津波にも負けず、この地に住まい続けてきました。しかし、2011年3月11日、東日本大震災による過去最大の津波被害によって、各地で高台移転・防潮堤建設が行われました。海沿いを走っていた気仙沼線も廃線となり、海と共に築いてきた人々の文化の数々はこれから先、忘れ去られてしまうのではないのでしょうか。

## 02. 線路跡が防潮堤に変わった赤牛漁港



●海が見えない強い境界をつくる防潮堤



●衰退する漁港と集落

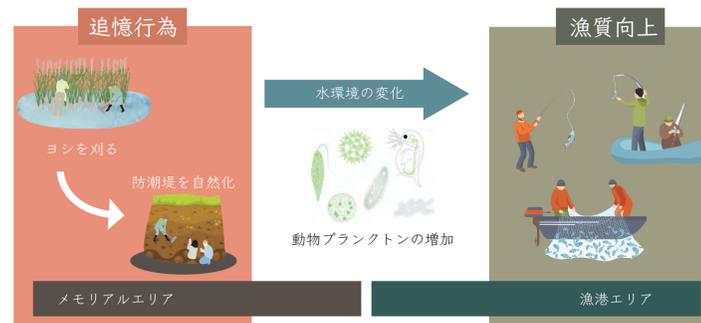


敷地として選定する赤牛漁港では、震災前、気仙沼線の高架が漁港の河口付近を通過していましたが、津波によって倒壊し、廃線となった今では、線路跡の盛り土を活用した防潮堤が海との強い境界を作っています。

また、漁港に隣接する赤牛・谷地地域では、低地に家を持っていた方々の高台移転に加え、日本全国の多くの過疎地と同じように人口減少が進み、漁港の衰退が進みつつあります。

## 03. 海との接点の再編

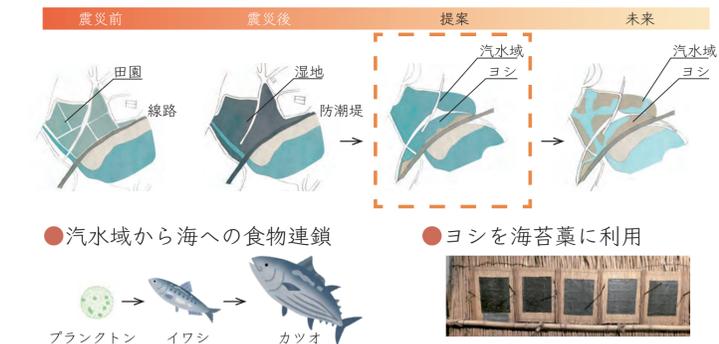
### ①追憶行為が魚を集めるヨシ原計画



宮城県ヨシ原は、琵琶湖の湖畔と並ぶ国内最大級の群生地「でした」。東日本大震災から護岸工事が進み、ヨシの収穫量は約10分の1に減りました。そこで、ヨシに重点を置いた追憶行為を提案します。

メモリアルエリアのヨシ原は、この地域の生業である漁業の質をより高めることができます。ヨシ原による動物プランクトンの増加は、水環境が改善され漁港の衰退速度を緩める要素となるでしょう。

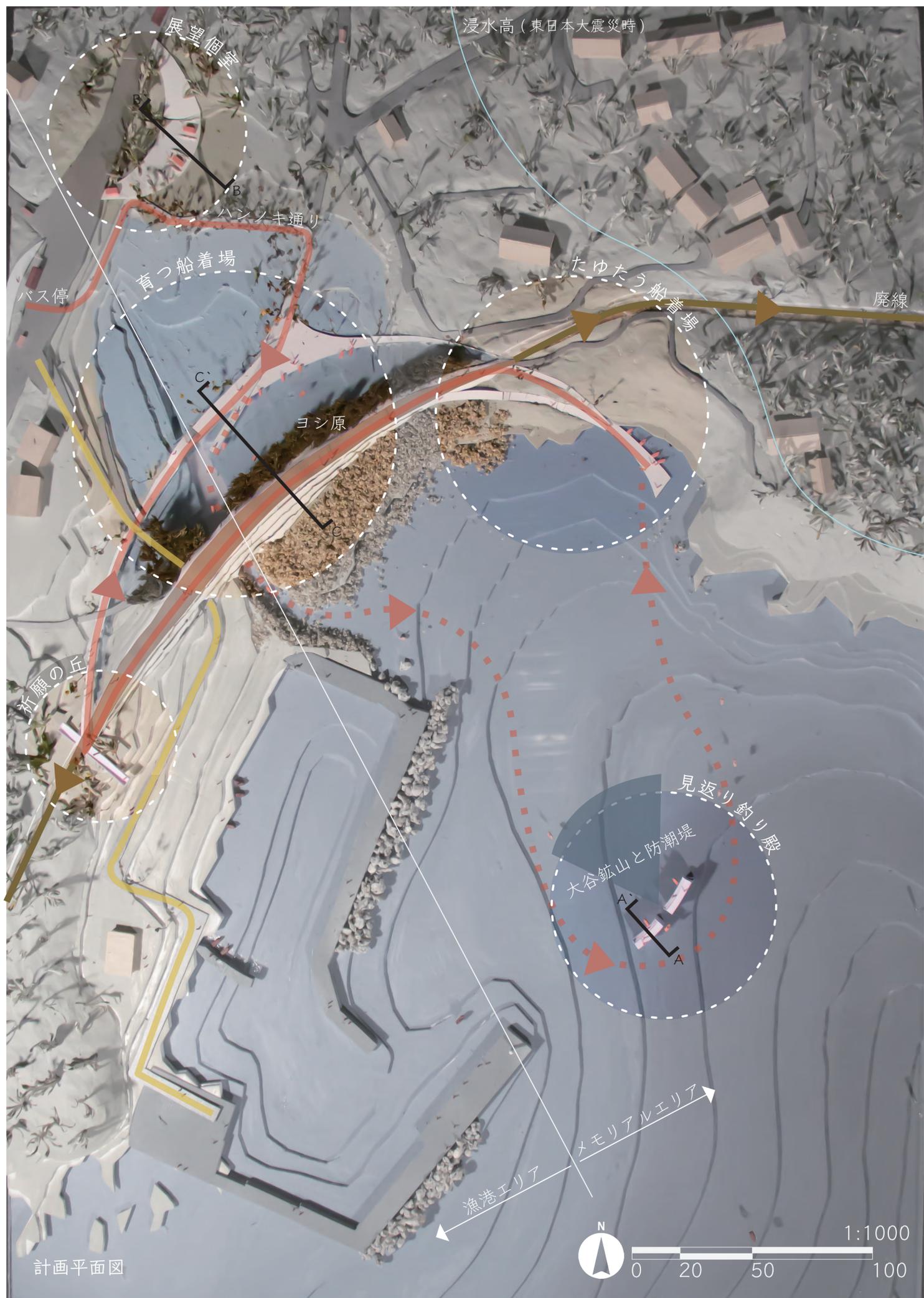
### ②汽水域が再生させる文化的景観



●汽水域から海への食物連鎖

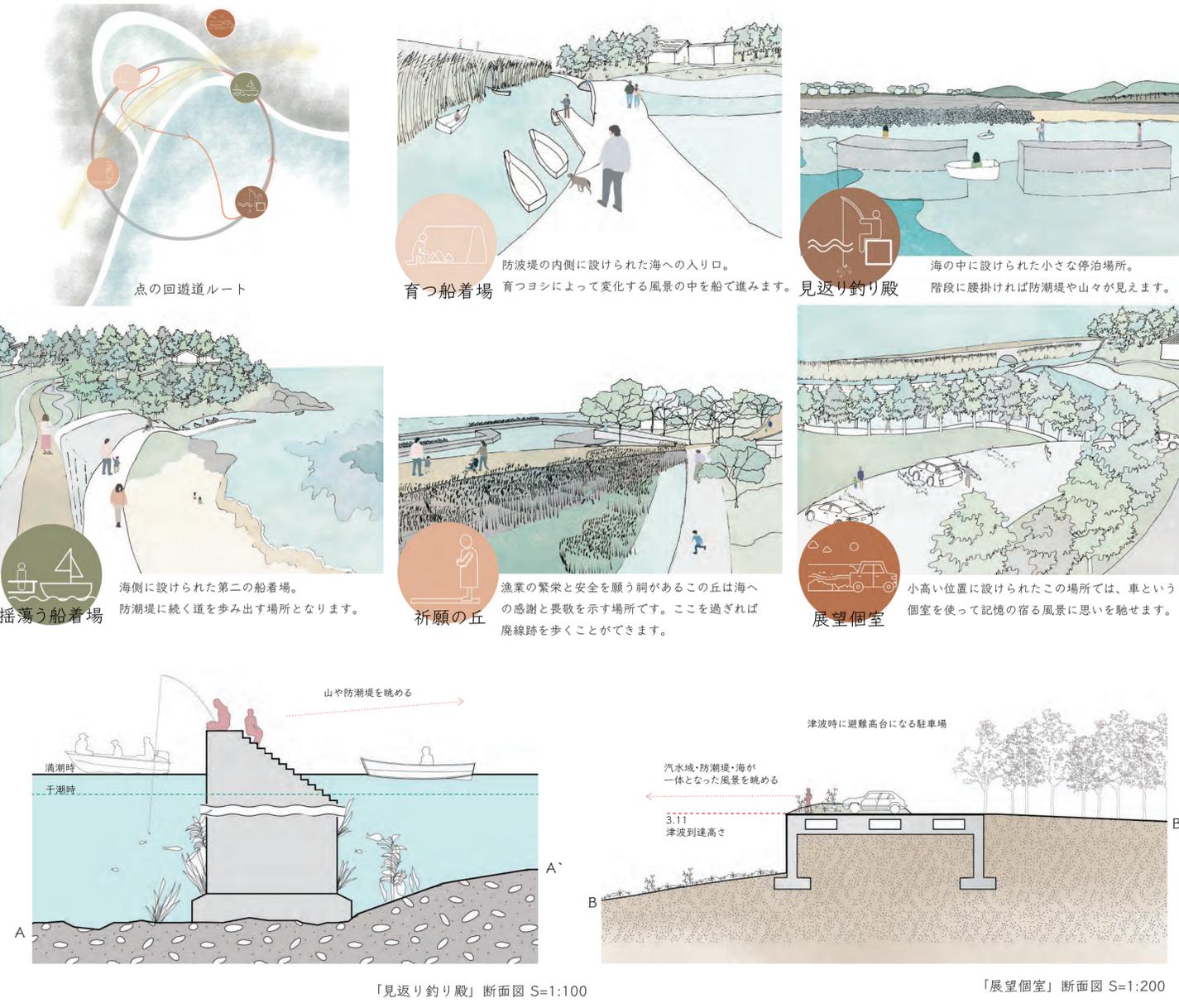
巨大な防潮堤より山側に、海への繋がりを持つ汽水域を提案します。海に生息するカツオなどの餌になるカタクチイワシはプランクトンを食餌とし、それらのプランクトンは真水と海水の交わる汽水域に発生します。また、汽水域のヨシは海苔藁として古くから使われています。

汽水域を新たに設けることで、生業・生活を継承する文化的景観をつくりあげることができます。

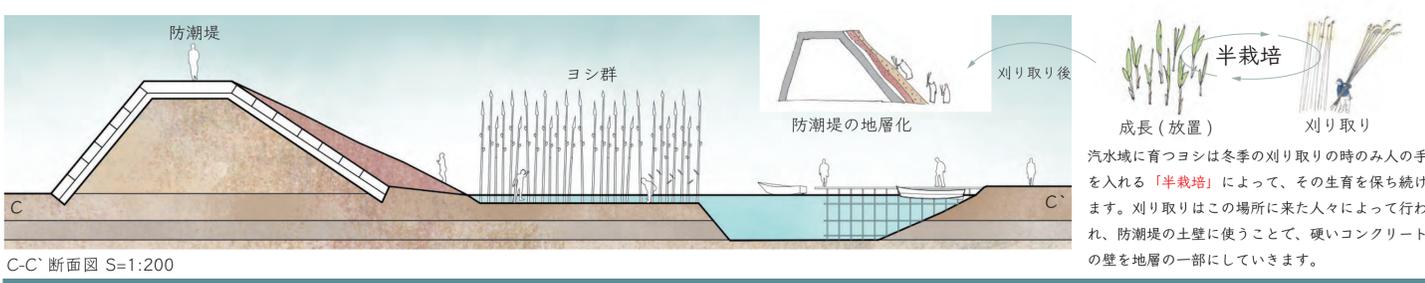


#### 04. 祈りの非日常性と漁業の日常性を共存させる「点の回遊道」

相反する生活の空間とメモリアル空間を分けつつ、「点の回遊道」がまたがることで互いの行為を尊重することが可能となります。



#### 05. ヨシの半栽培と地層化していく防潮堤



#### 06. 千年後まで積み重なる海との記憶

